

久木久一名誉教授略歴

明治 36 年 (1903 年)

9 月 20 日 小樽市住の江町に生まれた。

大正 10 年 (1921 年)

3 月 31 日 福井市立福井商業学校を卒業した。

4 月 1 日 小樽高等商業学校に入学した。

大正 13 年 (1924 年)

3 月 31 日 小樽高等商業学校を卒業した。

4 月 1 日 一年志願兵として歩兵第 7 連隊第 3 中隊に入隊した。

大正 14 年 (1925 年)

8 月 1 日 召集解除，陸軍歩兵曹長に任ぜられた。

大正 15 年 (1926 年)

1 月 25 日 北海道庁立稚内中学校教諭に任ぜられた。

昭和 3 年 (1928 年)

3 月 31 日 陸軍歩兵少尉に任ぜられた。

昭和 6 年 (1931 年)

4 月 8 日 小樽高等商業学校助教授に任ぜられた。

昭和 11 年 (1936 年)

8 月 22 日 小樽高等商業学校教授に任ぜられた。

昭和 12 年 (1937 年)

3 月 30 日 昭和 12 年度内地研究員に決定した。

昭和 19 年 (1944 年)

4 月 1 日 官制改正により小樽高等商業学校が小樽経済専門学校と改称されたのに伴ない，小樽経済専門学校教授に任ぜられた。

7 月 1 日 臨時召集により歩兵第 119 連隊補充隊に入隊した。

7 月 27 日 敦賀を出発した。

8 月 24 日 千島色丹島のイモネシリに上陸した。

10 月 12 日 勲六等に叙せられ，瑞宝章を授けられた。

昭和 20 年 (1945 年)

8 月 15 日 陸軍歩兵中尉に任ぜられた。

昭和 24 年 (1949 年)

8 月 29 日 ナホトカに上陸した。

9月1日 舞鶴に上陸し、復員した。

昭和26年 (1951年)

3月31日 小樽商科大学教授に配置換えされた。

12月17日 北海船員地方労働委員会委員に併任された(運輸省)。その後引き続き昭和42年5月8日まで就任した。

昭和27年 (1952年)

7月1日 小樽商科大学短期大学部講師に併任された。その後引き続き昭和42年3月31日まで就任した。

昭和29年 (1954年)

4月5日 小樽商科大学教務部長を委嘱された。任期は昭和31年9月30日まで。

昭和37年 (1962年)

4月1日から5月8日まで 第1回国際保険法学会に出席し(ローマ)、かねて保険学上の諸問題を研究するため、イタリア、西ドイツ、フランス、連合王国の各国へ出張した。

昭和40年 (1965年)

12月 北海道大学経済学部講師に併任され、13日から23日まで、保険論の講義を行なった。

昭和42年 (1967年)

3月31日 本日限り停年により小樽商科大学を退職した。

4月1日 小樽商科大学名誉教授の称号を授与された。

4月1日 専修大学商学部教授に就任した。

11月8日 藍綬褒章を授与された。

(以上、昭和42年12月31日現在)

久木久一名誉教授著作目録

昭和 8 年 (1933 年)

10 月 「交通価値と料金負担能力について」小樽高等商業学校「商学討究」第 8 卷中冊所収。

昭和 10 年 (1935 年)

6 月 「海上重複保険における先順位責任主義の問題」小樽高等商業学校「商学討究」第 10 卷上冊所収。

昭和 11 年 (1936 年)

11 月 「共同海損における代換費用の研究」『小樽高等商業学校創立 25 周年記念論文集』所収。

昭和 12 年 (1937 年)

6 月 「英海上保険証券における損害防止義務」小樽高等商業学校「商学討究」第 12 卷上冊所収。

昭和 13 年 (1938 年)

6 月 「海上保険における評価の効力」小樽高等商業学校「商学討究」第 13 卷上冊所収。

12 月 「英海上保険法における代位権」小樽高等商業学校「商学討究」第 13 卷下冊所収。

昭和 16 年 (1941 年)

12 月 「海上保険における戦争危険約款」『小樽高等商業学校創立 30 周年記念論文集、戦争と経済』所収。

昭和 17 年 (1942 年)

8 月 「海上保険における瑕疵危険」小樽高等商業学校「商学討究」第 17 卷上冊所収。

9 月 「費用海損について」日本保険学会編『戦争と保険』所収。

昭和 26 年 (1951 年)

2 月 「海上保険における招致危険」小樽商科大学「商学討究」第 1 卷第 3 号所収。

11 月 「曳船と衝突責任保険」小樽商科大学「商学討究」第 2 卷第 2 号所収。

昭和 27 年 (1952 年)

3 月 「救助料と保険者の責任」小樽商科大学「商学討究」第 2 卷第 4 号所収。

昭和 28 年 (1953年)

3月 「評価約款に関する一考察」『日本保険学会年報』所収。

9月 「国際海運カルテル——D. マルクス氏の新著書を通じて」小樽商科大学
『商学討究』第4巻第2号所収。

昭和 29 年 (1954年)

10月 「離路と船主責任の制限——米国の新判例について」小樽商科大学『商学
討究』第5巻第2号所収。

昭和 31 年 (1956年)

3月 「All Risks と All Loss or Damage の保険について」小樽商科大学『商
学討究』第6巻第4号所収。

昭和 32 年 (1957年)

12月 「船舶危険に於ける船渠費用の負担について」『加藤由作博士還暦記念保
険学論集』所収。

昭和 36 年 (1961年)

8月 「海上保険における衝突概念」小樽商科大学『商学討究』第12巻第1・2
号所収。

昭和 38 年 (1963年)

6月 「費用海損と保険者の責任」『保険学雑誌』第421号所収。

8月 「Extraneous Risks について」『勝呂博士還暦記念保険学論集，保険理
論の新展開』所収。

昭和 40 年 (1965年)

5月 「英法における単独費用と保険者の責任」『損害保険研究』第27巻第2号
所収。